

シンガポールに住んで体験した現地の文化

前シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校 教諭
山形県北村山郡大石田町立大石田小学校 教諭 松田 恵

キーワード：在外教育施設、シンガポール、国際交流、現地の文化

1. はじめに

シンガポールは中華系、マレー系、インド系の3民族が大多数を占める多民族国家である。街を歩けば、その文化の民族衣装を着て歩いている人がたくさんおり、公用語が英語とはいえ、街中では自分たちの母国語で話している人がたくさんいる。シンガポールでは英語、中国語、マレー語、タミル語（インドの言葉）の4か国語が看板に記されており、シンガポールの祝日は中華系、マレー系、インド系の祝日が1年間に均等に入っているということからも、様々な文化が共存している面白い国であることがわかる。このシンガポールに住み、学校現場での活動と、私生活での活動を通して体験することのできた現地の文化についてまとめてみた。

2. 活動の実際

(1) 4年生の総合学習を通して

シンガポール国家の特色と、クレメンティ校の学校目標「豊かな国際感覚を持ち、世界の人々とつながろうとする人材の育成」から、「シンガポール（ローカル）の風習や、人々の暮らしぶりに触れ、学び、調べることを通して、現地の人たちとのよりよい交流を目指した学習」を担当した4年生の総合学習で行った。年間を通して、この3つの文化の特色の濃い街に、その特色が一番あらわれる時期を選び、校外学習に出かけて体験学習を行った。インターネット、本などで調べたり、その文化で育った校内のローカルスタッフに話を聞いたりしながら、事前に調べ学習を行い、子どもたちで計画をたてた。もちろん質問する内容を考えて、英訳する作業も行った。実際に校外学習に行った時は、グループで活動した時もあり、その際は保護者ボランティアに同行してもらった。

①マレー系の文化について

シンガポールにはマレー系の民族が全体の約14パーセントいると言われている。そのなかの大多数の人が信仰しているイスラム教のことを学習するために、「サルタンモスク」の見学に行った。断食が明けるハリラヤプアサというお祭りの時期がいちばんにぎやかだが、断食月はイスラム教徒の人は太陽が出ているときは、飲食しないことになっているので、子どもたちが校外学習に行く昼間の時間帯は閑散としている。今回校外学習に行った時は、断食月に入る前だった。現地で日本人のイスラム教徒の方にガイドをしていただきイスラム教徒のお寺というモスク内を見学、ホールにてスライドを見ながらイスラム教について学んだ。モスクに入る前に体を清める（洗う）場所があり、礼拝をする人はきれいに洗ってから礼拝に向かうとのことだった。モスク内は男性と女性の礼拝の場所が分かれていた。モスクに入る際の注意事項として、肌を露出しない服装でといわれていたが、子どもの中に丈の短いズボンをはいてきた子があり、マントを借りて中に入った。ホールで説明をし



サルタンモスク見学

ていただいた後、子どもたちはイスラム教の人が着用する独特の衣服を着させてもらった。女の子は髪の毛をすっぽり覆うものをかぶり、全身が隠れるワンピースのようなものを着た。見た目はとても暑そうに見えるが、実際に来てみると見た目より暑くないことに驚いていた。イスラム教は一日に5回メッカの方角を向いてお祈りをする事、偶像崇拝は禁止であること、女性は肌を露出してはいけないこと、豚肉は食べないことなど、はじめて知ることが多く、子どもたちも熱心に話を聞いていた。

②インド系の文化について

シンガポールにはインド系の民族が全体の約9パーセントいると言われている。シンガポールにはインド系の人たちが多く住むトルインディアという地区があるため、その地区に校外学習に行った。時期は11月にディーパバリという大きなお祭りがある、一年の中でも一番インドの文化が色濃く表れる時期を選んだ。ディーパバリとは光の祭典とも言われ、夜に行くとそのきらびやかな電飾が眩しい。インド系の人々の多くが信仰しているヒンドゥー教のお寺スリ・ヴィラマカリ・アンマン寺院を見学した。偶像崇拝が禁止されているイスラム教のあとだったこともあり、たくさんの神様がいて、しかも色鮮やかで独特の体を持つことに驚いた様子だった。またイスラム教では豚を食べないことに対して、ヒンドゥー教では牛を食べない。これにも驚いていた。この校外学習のときはグループ活動で、お昼は多くの子どもたちがインド料理の代表的な軽食プラタを食した。インドの料理はスパイスが効いており、子どもたちには辛く、食べきれない子もいたようだった。そして祝い事があるときに描くヘナタトゥーとよばれるものを描いてもらったり、インド独特の香辛料を探したりするなど、インドの文化を体験することができた。

③中華系の文化について

シンガポールには中華系の民族が全体の75パーセントいると言われている。よって、シンガポールの人のほとんどが中華系と言っても過言ではない。インド系と同じく、シンガポールには中華系の人たちが多く住むチャイナタウンと呼ばれる地区があり、その地区に校外学習に行った。時期は旧正月の2月を選んだ。旧正月前のチャイナタウンはとても賑やかでその年の干支にあたる動物をモチーフにしたデコレーションや、縁起がいいとされる赤や金などの色で街中がきらびやかだった。

チャイナタウンにはチャイナタウンの歴史を学ぶことができるヘリテージセンターがある。この時もグループ活動だったが、子どもたちはそのセンターを見学したり、佛陀の歯があるという佛牙寺を見学したり、チャイナタウンの歴史はここから始まったといわれるマジスティックシアターの壁画を見学したりした。中華系の文化はマレー系、インド系に比べると子どもたちには馴染みが多いらしく、昼食もチキンライスを食べる子、飲茶を食べる子、ホッケンミーと呼ばれる焼きそばのようなものを食べる子と様々であった。

(2) 私生活における現地の人たちとの交流を通して

①ナショナルデーパーティ (シンガポリアン)

シンガポール建国48周年の年、シンガポリアンの方から、ナショナルデーのお祝いをするからと招待していただいた。8月9日招待していただいたお宅はHDB (Housing & Development Board) と呼ばれる、国が運営しているいわゆる公団のような住宅だった。息子さんと2人暮らしだというお宅は、2部屋とそんなに広くはないもののとてもきれいに使っていた。はじめてHDBにお邪魔したが、この暑いシンガポールでもエアコンはなく、扇風機で過ごしていた。台所を見せていただくと、ガスがひとつ、水道ひとつというシンプルな作りである。お手洗いはやはりトイレットペーパーは置いておらず、水で洗い流す習慣だった。

②ディーパバリパーティ (インド系シンガポリアン)

シンガポールの祝日の一つ、ディーパバリにインド系シンガポリアンの方から、招待された。HDBのお宅でのパーティだった。2階建てのメゾネットの作りで、とても広く、一部屋を神様の部屋として使っていた。その部屋にはヒンデューの神様のラマとシータが祭られてあった。部屋の床にはランゴリと呼ばれる色のついたお米や、水で溶いた小麦粉できれいに絵が描かれてあった。お宅には次々と親戚や友だちがやってくる。

‘Happy Dipavali’ と口々にお祝いを言い、親戚一人ひとりに神様の前で、日本で言うお祓いのような儀式をする。お祈りをしてローズウォーターをかけたり、お米をかけたりして最後にバッグや布など、新しいものを手渡す。日本のお正月に近いものを感じた。

③チャイニーズニューイヤーパーティ

日本でいうところの旧正月。こちらではこの旧正月が本当のお正月である。家の近所のコミュニティーセンターでチャイニーズニューイヤーパーティが行われるので、参加させていただいた。チケットを\$23で買い、食事や飲み物が付く。まずはローヘイといわれる、チャイニーズニューイヤーで食べるサラダのようなものが出てくる。これを乾杯代わりに「ローヘイ」と叫びながら、みんなではしでまぜあわせる。はしでつかんだら、高い位置から落として混ぜるといふ、日本の文化だと行儀が悪いと叱られてしまいそうな混ぜ方だ。皿のまわりはぐちゃぐちゃになるが、それでいいと言う。まぜたものをみんなでつついて食べた。

そのあと、コミュニティーセンターの代表の方のあいさつで

乾杯。これも叫んでするのだが、驚くのは声をずっと伸ばすことだった。「あーーーーー」と長ければ長いほどいいようだ。それが何回も続く。会の途中、いたるところのテーブルからこの声が聞こえてきた。パーティの間はステージ上で様々なショーが催された。テーブルの間をひげをつけた神様が歩き、みんなに金のチョコレートを二つずつ配ってくれる。これも縁起物とのことだった。中国では偶数がいい数字とされており、お土産には2個のオレンジ、2ドルのアンパオ（お年玉みたいなもの）などをいただいた。



家庭にあるヒन्दュー教の神様

3. おわりに

在外教育施設派遣教員という立場で、シンガポールに3年間住み、生活することができた。生活することによって、現地の文化を体験する機会を多く得られ、現地の方たちとも深い交流を図ることができた。幸せなことに、わたしは英語が話せないにも関わらず、たくさんの現地の方に親切にいただき、とてもいい体験ができたと感じている。1つの国にいながら、様々な文化に触れることができた、このシンガポールという国に改めて住むことができよかったです。